



発行 真宗大谷派 高山教務所
 発行者 大町慶華
 〒506-0857 高山市鉄砲町6番地
 ☎(0577)32-0776
 *毎月20日発行 50,000部
 三市一部無料配布
 印刷 山都印刷株式会社

念じられ 照らされて

禍福は糾える縄の如し
 — 活断層のつばやき —

下畑 五夫



〔略歴〕
 一九四七年生まれ。高山陸軍学
 芸員。飛騨地学研究会々長。
 日本学生科学賞指導教員賞受
 賞。著書に「新ひだ風土記」、
 共著に「ひだ、みの活断層を
 訪ねて」など。

昨年三月十一日の巨大地震(M9.0)は、原発事故まで伴ない甚大な被害を与えた。この大災害から人々は、ひときわ地震に強い関心を寄せるようになった。また原発事故によって、私たち人間のあり方までも問われたような気がする。

さて、若狭湾を臨む地に大飯原発(日本ではたまた基稼働中)と敦賀原発がある。今この両原発の敷地内の岩盤にある断層(割れ目)が、活断層か否か大きな問題となっている。元々地学用語であった「活断層」がこれほど人々の関心を引くようになったのは、いうまでもなく「活断層が動いて地震が起きる」ということが広く人々

に認識されたからであろう。また、活断層か否かが主な関心事になっており少々気にはなる。

活断層を地学的に定義すると「第四紀(百七十万年前から現在)という最も新しい地質時代に活動を繰り返す、今後も動く可能性のある断層」ということになる。最近では、活断層の調査・研究が進み、その活動期間を七十万年前より新しい時代に限定する見解が有力になっている。

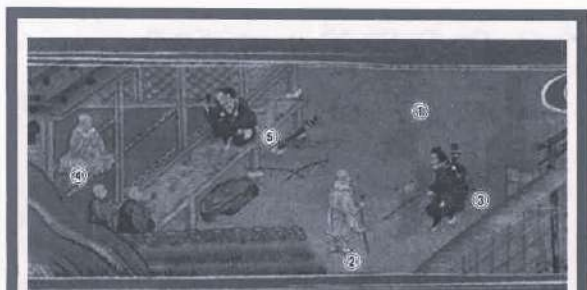
いずれにしても活断層の寿命(万年単位の活動期間)は、私たち人間の寿命(何十年単位)とは、全く桁が違う。いうならば活断層の時計目盛の百年・千年は、人間の時計目盛の秒や分に相当する断層の有無を論ずるばかりではなく、「どこでもいつかは大地震は起きる」を前提に社会の仕組み(耐震性の構造物・避難システムなど)を整えることが急務であろう。それと同時に利益・辺側の社会でいいのかというつばやきも聞かなくてはならない。

このように活断層がクローズアップされるのは、近い将来活動し、人々に大きな禍をもたらす恐ろしい存在と捉えられているからに他ならない。

まさに活断層は、諸悪の根源と化した感がある。しかし、意外に思われるかも知れないが、活断層は人間にとって必ずしも「禍」ばかりをもたらす存在ではない。

断層が動くことと断層面の両側の岩盤が破壊されるいわゆる破砕帯が生じる。この破砕帯は、当然間隙が多く、水の通り道や貯まる所になる。若い断層(いわゆる活断層)が数多く分布する日本は当然のことながら破砕帯も多い。したがって、日本の大地は保水力に富み、再生力のある豊かな森を形成し、最近まで日本の重要な資源となっていた。

また、大地にしみこんだ水は地下水となりゆったりと循環をする。その結果、狭い国土でありながらめつたに枯れることのない河川が流れ、瑞穂の国を作り上げた。そして、



「弁円、聖人の門弟となる」

- ① 稲田の草庵
- ② 弁円を迎える親鸞聖人
- ③ お辞儀をする弁円
- ④ 教えを説く聖人
- ⑤ 月をすてた弁円

絵解親鸞聖人絵伝27

水質の面でも他に類を見ないきれいでおいしい水に恵まれている。さらに地下に浸透した水が、温められたり様々な成分を溶かし込み、温泉としてあちこちに湧出している。火山が多いこともあり温泉天国となっている。これらは活断層の「福」の一面である。

活断層が動くこと自体は、ごく当たり前の地球の営みの一つであり、禍福の判断とは無縁である。禍福の判断は、あくまで人間の側からの視点である。いずれにせよ私たちは、活断層によって禍福を糾われた縄の中で、先祖代々生命を受け継いで、今ここにいます。

東本願寺創立の上人 教如上人四百回忌法要のご案内

二〇一三年は、真宗大谷派第十二代教如上人(二五八〜一六四四年)の四百回忌にあたり、東本願寺の春の法要期間中に四百回忌法要が勤まります。

教如上人は、当時大坂石山にあった本願寺を守り、門徒と共に織田信長と最後まで戦った方です。そのため信長の死後、豊臣秀吉に疎まれ不遇な時代がありました。しかし、一六〇二年に徳川家康から京都烏丸七条の現在地を寄進され、新たに本願寺を別立されました。これが東本願寺の始まりです。

〔四百回忌法要期間〕

二〇一三年

四月二日(火)〜四日(木)

高山別院でも四百回忌法要団体参拝を予定しております。詳細が決まりましたら改めてご案内させていただきます。



親鸞聖人絵伝下巻第三段「弁円浄度」②

板敷山で、親鸞聖人の待ち伏せに失敗した山伏弁円は、稲田の草庵に自ら乗り込みました。ところが、聖人の顔を見ると、思わず身をお辞儀をしておりました。そして聖人に招かれるまま草庵にあらがりました。

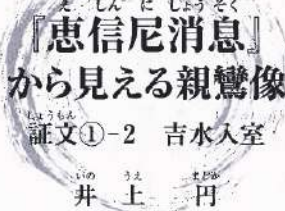
聖人は「末法の世であるからこそ、罪業深重、煩惱熾盛の私たちは、自らを頼み行ずる聖道の教えでは救われない。念仏は、弥陀如来が私たちを救うという願を建て、回向してくださった行であるから、疑いなく専ら念仏を称えることで救われるのだ」と、懇々と本願念仏の教えを説きました。弁円は聖人への恨みも失せ、頭を垂れて聞いていました。そして改悔した弁円は携えていた刀をすて弓矢を折り、弟子となり法名を明法房証信といただきました。

その後、弁円は聖人の布教のお伴をさせていただきましたが、板敷山を通る度に、昔のことを思い出して「山も山、道も昔に変わらねど変わ果てたるわが心かな」と詠んだと伝えられています。

聖人が京都へ戻って十数年、明法房の死が伝えられると、聖人は「明法房は本願念仏に帰して、往生を遂げることができてよかった」と返信に認めています。

一二〇一(建仁一)年四月五日、六角堂に参籠して九十五日目に、親鸞聖人は夢の中で「女犯の偈」を感得した。その後のことを「恵信尼消息」(第三通)は、「やがてそのあかみ、出でさせ給いて、後世の助からざる縁にあいまいに、たずねまいらせて、法然上人にあいまいらせて」と語っている。夢告を得たその晩に六角堂を出て、すぐさま法然上人のもとを訪ねたという。それは、聖人は既に法然上人のことを知っていたようである。逆に言えば、自分の中で決着がつかない限りは、会いに行かなかったということでもある。そこに着実に開進の歩みを進める聖人の性格が現れているように思う。これは、その後続く「又、六角堂に百日こもらせ給いて候けるように、又、百か日、降るにも照るにも、いかなる大事(大風)にも、参りてありし」ということも重なってくる。聖人は、六角堂での九十五日の参籠、吉水の百日の聴聞、つまり計半年以上を掛けて「後世の助からざる縁」を確かめたのである。

その中で聞き取ったことを、恵信尼は「ただ、後世の事は、善き人にも悪しきにも、同じように、生死出ずべきみちをば、ただ一筋に仰せられ候いしをうけ給わり候しかば」と伝えている。善人や優れた人には優れた特別の行を、悪人や劣った人には劣ったそれなりの行をと、各別に勧め続けてきたのが、長い仏教の歴史であった。生死出ずべき道として「ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべし」と一筋に勧める法然の説示は、画期的なものであった。人間の才能や努力の違い、出自・境遇の差によって、さまざまな道を用意すること、かろうじて一乗を標榜していても、条件を備えられない人の救いの望みを断ってきたのが、事実ではなかったのか。法然の浄土宗の独立には、こんな悲痛なる告発が隠されている。弥陀如来の本願による念仏一



らせ給わんとするには、人はいかに申せ、たとい惡道にわたらせ給うべしと申すとも、世々生々にも迷いければこそありけり、とまで思ひまいらす身なればと、ようやくに人の申し候いし時も仰せ候いしなり」と、自らの決意を折々に語ったという。「歎異抄」第二條と重なる表現が示されている。唯円も、その同じ吐露を聞いて、大切な告白であるとして明記している。「助かるはずの身」を生きているうちは、依るべき道は決まらない。「助かるはずの身」と気づけばこそ、「助けんと誓う本願念仏」が「助からなければならぬ身」の依るべき道となる。法然は自ら「愚痴の法然房」と「助からない身」を包み隠さず告白して、その身を「助けんとする念仏」を大切に伝えた。その同じ「助からない身」に立つことで、法然への信頼は不動のものとなり、ただ念仏申す道こそが、聖人の依るべき道となったのである。

第31回 別院真宗公開講座

講師 三明智彰氏 (九州大谷短期大学 副学長)

日時 1月22日(火) 午後2時~4時

講題 「浄土における寿命について」

会場 高山別院御坊会館

聴講費 1回毎600円

※当日受付にてお支払いください。

高山別院 年末年始のご案内

高山別院では年の暮れ、参道両脇や階段にロウソクを灯す万灯会、年越し前から除夜の鐘つきが始まります。新年0時から本堂にて修正会が勤められます。修正会は、一年の初めに莊厳を整え、身も心もひきしめ、仏恩報謝の思いをもって新しい年にのぞむ仏事です。ぜひ、お参りいただき新年の歩みを始めましょう。

万灯会	12月31日(月) 午後11時	
除夜の鐘	12月31日(月) 午後11時45分	※甘酒を用意しております
修正会	1月1日(火) 午前0時	三島多聞氏(真蓮寺)
	1月2日(水) 午後1時	大町慶華 輪番
	1月3日(木) 午後1時	窪田哲氏(圓徳寺)

高山別院お煤払い奉仕のお願い

12月21日(金) 午後1時からのお勤めの後、本堂などのお煤払いを行います。1年の汚れを落とし、新年をお迎えします。ぜひともご奉仕をお願いいたします。

※持参品: マスク・タオル

ご回壇案内

11日(金) 暁芳寺下二之町

12日(土) 稱讃寺下二之町

真宗本廟(東本願寺) 収骨団体参拝 参加者募集

真宗本廟収骨とは、京都東本願寺の親鸞聖人の御眞影が安置される御影堂にご遺骨をお収めすることです。収骨を行うには、相続講金を納めることにより発行される収骨證が必要です。ご希望の方は、お手次のお寺までお申し込みください。

期間 3月2日(土)~3日(日)【1泊2日】

日程 涉成園にてお齋、真宗本廟法話、収骨、阿弥陀堂屋根見学、大谷祖廟参拝など

宿泊 アパホテル京都駅前

定員 30名 ※定員になり次第締め切り

参加費 お一人28,000円

締切 2月6日(水)

大谷婦人会 新年定例会

期日 1月11日(金)

時間 午後1時から

会場 別院御坊会館

法話 大町慶華 輪番

甘酒の接待があります

お聖教に触れてみませんか 聖教学習会のご案内

親鸞聖人が大切にされた「唯信鈔」という書物を読みます。共にお念仏の教えを確かめましょう。ぜひ、ご参加ください。

講師: 安富信哉氏(大谷大学特別任用教授)

講題: 「唯信鈔」講義 一法然から親鸞へ

日時: 2013年1月10日(木) 午後1時半~4時半

会場: 高山別院会館2階 研修室

聴講自由